

## 「十字架に関するヘブ林的考察」

キリスト教といえば「十字架」です。今回はこの十字架と、またこれに関わった幾人かの人物に関するヘブ林的考察を試みてみました。

### 1. 十字架

祭司長たちや役人たちはイエスを見ると、激しく叫んで、「十字架につけろ。十字架につけろ」と言った。ピラトは彼らに言った。「あなたがたがこの人を引き取り、十字架につけなさい。私はこの人には罪を認めません。」(ヨハネ 19:6)

ユダヤ人たちの要求は、イエシュアを殺すことではありません。「十字架につける」ことでした。なぜ十字架でなければならなかったのでしょうか。このこだわり方は異常です。十字架は、ヘブル語でツエレーヴ(צֶלֶב)と言うそうです。当然のことながら、ローマの刑罰であるこの言葉は、旧約聖書の中には存在しません。しかしその前の部分にあたるツェール(צֶלַ)という言葉が「陰、影」を表し、それが最初に使われた出来事が創世記 19 章にあります。

お願いですから、私にはまだ男を知らないふたりの娘があります。娘たちをみなの前に連れて来ますから、あなたがたの好きなようにしてください。ただ、あの人たちには何もしないでください。あの人たちは私の屋根の下に身を寄せたのですから。」(創世記 19:8)

この出来事は、アブラハムの時代に起こった、ソドムとゴモラの滅亡の一場面です。神は、ソドムとゴモラの町を、ロトとその家族を除いてすべて滅ぼすことをロトに告げるために、彼を訪れました。そしてロトは喜んでこれを自分の「家」に迎え入れました。このことによってロトとその娘たちは滅びを免れた、という出来事です。ここで使われている「屋根の下」という部分にツェールという言葉が使われています。ですからこのツェールには「神を家に迎え入れる」、つまり「神と人がともに住む」という概念があることが解ります。

またこのツェールは、単なる影ではなく、神の「守り」「隠れ場」を表す言葉として用いられています。

私を、ひとみのように見守り、御翼の陰に私をかくまってください。(詩篇 17:8)

そのツェールの後ろに「家」を表す文字ベート(ב)がつけられていることから、十字架、ツエレーヴは「神に守られた家」という概念をもった言葉であることが解ります。神に守られた家とは、すなわち「御国」のことではなくて何でしょうか。またこのツエレーヴを構成する三つの文字を別々に考えた場合、「義」を意味するツァーデー(צדק)、「杖、権威」を意味するラメッド(מ)そしてベート、これらを組み合わせると「義なる方が、権威の杖をもって治めし国」となり、これもイエシュアが鉄の杖をもって世界を治める「メシア王国」としての「御国」を表す言葉となります。

女は男の子を産んだ。この子は、鉄の杖をもって、すべての国々の民を牧するはずである。その子は神のみもと、その御座に引き上げられた。(黙示録 12:5)

このように、ヘブル語の視点で見ると、十字架は「御国」を指し示すものなのです。「十字架につける、十字架につける」と、あくまで十字架にこだわったのは、ユダヤ人たちではなく、実は神ご自身だったのです。十字架は教会とクリスチャンのシンボルです。私たちはこれを見上げる時、私の罪の身代わりとなって死んでくださったイエシュア、そして神の愛を思い、感謝をささげるのです。しかしそれだけではない、いやそれよりももっと大切な、神の計画の完成である「御国」の姿が、十字架、ツエレーヴには表されているのです。

では、次にこのイエシュアの十字架に関わった人物たちにスポットを当ててみたいと思います。

## 2. ピラト

そこでピラトは、そのとき、イエスを、十字架につけるため彼らに引き渡した。(ヨハネ 19:16)

使徒信条の一節「ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ…」とあるように、十字架といえばピラトです。マタイ 27 章では、ピラトはユダヤ人たちの前で水で手を洗って見せて、この件に関しては自分には責任がないことを表明したことが描かれていますが、ヨハネの福音書ではあくまでも「ピラトが十字架に引き渡した」つまりピラトを通して、ピラトによって十字架につけたことが強調されています。その理由はピラトの名前が、ヘブル語の視点で見ると一つのメッセージを持っているからだと考えられます。実はピラト (פִּילָטוֹס) という名前にはパーラト (פָּלַט) 訳すと「救う」という言葉が隠されているのです。たしかにピラトはイエシュアを釈放する、つまり「救う」ことはできませんでした。しかしイエシュアを十字架につけることで、それを信じるすべての人を永遠の滅びから「救う」ことができるようになったのです。

因みにパーラトを構成する三つの文字を分解すると、ペー (פֶּ) は「口、ことば」、ラメッド (ל) は「学び、訓練」、テット (ט) は「知恵」を意味していると考えられていることから「ことばを学び、知恵を得る」ということが「救い」のもつ概念だと考えられます。「ことば」は神のことば、「知恵」は神が与える知恵ですから、どちらも究極的にはイエシュアを指し示すものだと考えられます。

## 3. アリマタヤのヨセフ

そのあとで、イエスの弟子ではあったがユダヤ人を恐れてそのことを隠していたアリマタヤのヨセフが、イエスのからだを取りかたづけたいとピラトに願った。それで、ピラトは許可を与えた。そこで彼は来て、イエスのからだを取り降ろした。(ヨハネ 19:38)

アリマタヤのヨセフ (יְהוֹסֵפִי בֶן־מִרְיָם) 、なぜ彼だったのでしょうか。従来であれば想像の域を出ない彼の存在意義も、ヘブル語で見ると聖書的な意味を見出すことができます。まずヨセフ (יְהוֹסֵפִי) はヤーサフ (יָסַף) 訳すと「加える、引き続き~する、よりまさる、再び~する」という意味の言葉が語源になっています。そしてアリマタヤですが、これは旧約聖書ではラマタイムと表記されている「高台、高所、山地」を意

味する言葉です。因みに旧約の預言者にして最後の士師と呼ばれるサムエルの出身地は、エフライムの山地ラマタイム・ツォフィムと言います。ラマタイム、ヤーサフこの二つを合わせると「再び高くそびえる場所、よりまさって高い場所、高くあり続ける場所」というような言葉が出てきます。これは終わりの日にエルサレムに起こる預言を指し示す言葉と考えることができます。

終わりの日に、主の家の山は、山々の頂に堅く立ち、丘々よりもそびえ立ち、すべての国々がそこに流れて来る（イザヤ 2:2）。

イエシュアはこの終わりの日の主の山、エルサレムを指し示すアリマタヤのヨセフのもとに取り「下ろされます」そしてそれはピラトの許可を得て、つまりピラトを通してです。先ほどピラトの名前にはパーラト「救う」という意味が込められていることをお伝えしました。つまりイエシュアがアリマタヤのヨセフによって取り下ろされるといふ一見些細な行為の中にも、パーラト、救いの計画が表されているということであり、その救いとは、イエシュアが再臨してエルサレムに帰って来ることであることが表されているのです。

#### 4. ニコデモ

前に、夜イエスのところに来たニコデモも、没薬とアロエを混ぜ合わせたものをおよそ三十キログラムばかり持って、やって来た。（ヨハネ 19:39）

ではニコデモ（**נִקְדֵּימוֹן**）はどうでしょうか。彼は十字架にだけ関わった人物ではありませんでした。イエシュアと一対一で対話した数少ない人の一人であり、聖書中最も有名なみことばとも言われる

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。（ヨハネ 3:16）

このみことばを言わしめた人物です。ですからそれだけに重要な意味を持った存在であると考えられます。まずこの名前の中にはノーケード（**נֹקֵד**）訳すと「牧者、羊飼い」という意味の言葉の複数形ノクディーム（**נֹקְדִיִּים**）が込められており、イスラエルの民が世界のリーダーとして、まさに「羊飼いの民」として立つメシア王国、千年王国の統治形態を指し示す言葉と考えられます。

またこのノクディームと同じ綴りで、ナーコード（**נֹקֵד**）訳すと「(羊ややぎの) ぶち毛のもの」という意味の言葉の複数形ネクッディーム（**נֹקְדִיִּים**）もあり、これはヤコブ、後のイスラエルが伯父のラバンの家で働いて得た報酬に関係してきます。

こうして、群れは枝の前でさかりがついて、しま毛のもの、ぶち毛のもの、まだら毛のものを産んだ。…こうして弱いのはラバンのものとなり、強いのはヤコブのものとなった。（創世記 30:39~42）

ヤコブ、つまりイスラエルの羊の群れがラバンのものより強く、また増えていったことが描かれていますが、通常羊や山羊は白または黒なのですが、まれにぶち毛やまだら毛、しま毛のものが生まれます。ヤコブは自分

の報酬となるぶち毛やしま毛、まだら毛の羊が多く産まれるように工夫しました。つまり白い羊と黒い羊をうまく組み合わせたのです。その結果、ヤコブの取り分、報酬は、当初は少なかった、というカラバンの陰謀で殆どゼロだったのですが、結果的には非常に多くなり、また強くなりました。つまり本来は少ないとされる「ぶち毛」ナーコードは、ヤコブ、すなわちイスラエルの視点で見ると「質の良い、多くの報酬」を意味し、これはアブラハム契約の成就、その型と考えられます。

わたしは確かにあなたを大いに祝福し、あなたの子孫を、空の星、海辺の砂のように数多く増し加えよう。そしてあなたの子孫は、その敵の門を勝ち取るであろう。(創世記 22:17)

ぶち毛の羊を生ませる方法は、まったく毛色のちがうもの同士を巧みに組み合わせる、混ぜるのではありません、「組み合わせる」のです。メシア王国、千年王国ではイスラエルと、それ以外の国々の民すなわち異邦人の区別が存在します。つまり毛色の違う二つの羊の「群れ」があるわけです。それが混ざり合うのではなく、区別を持ちつつ一つになるのです。それが「ぶち毛」ナーコード、ネクッディームが示す「御国の国民」の姿です。

またニコデモにはケデム (קֶדֶם) 訳すと「東」という意味の言葉も見つけることができます。先ほどのアリマタヤのヨセフが、エルサレムを指し示しているとすれば、彼とこのニコデモが共にイエシュアを十字架から下ろした事実は、「エルサレムの東にイエシュアが降り立つ」ことを表しているとも考えられます。

その日、主の足は、エルサレムの東に面するオリーブ山の上に立つ。オリーブ山は、その真ん中で二つに裂け、東西に延びる非常に大きな谷ができる。山の半分は北へ移り、他の半分は南へ移る。(ゼカリヤ 14:4)

そしてこのケデムは、東という意味だけでなく「昔」という意味もあります。ニコデモに隠されたこれらの神の計画は、「遠い昔」から定まっていたと解釈することもできます。

## 5. マグダラのマリヤ

さて、週の初めの日に、マグダラのマリヤは、朝早くまだ暗いうちに墓に来た。そして、墓から石が取りのけてあるのを見た。(ヨハネ 20:1)

マグダラのマリヤ (מַרְיָם הַמַּגְדָּלִית) は、イエシュアの十字架に立ち会っただけでなく、イエシュアに付き従い、復活したイエシュアに最初に出会った人物としても有名です。マグダラ (הַמַּגְדָּלִית) は、ヘブル語発音ではミグダール (מִגְדָּל) 訳すと「塔、やぐら」という意味です。そしてマリヤは、ヘブル語発音ではミルヤーム (מִרְיָם) で、メリー (מְרִי) 訳すと「反逆」という意味の言葉が隠されていると考えます。つまりマグダラのマリヤには「反逆の塔」という意味があると解釈します。そしてこれは創世記 11 章の「バベルの塔」と関係があると考えられます。なぜならミグダールという言葉が、聖書の中で初めて使われるのがこの箇所だからです。

## 創世記

11:1 さて、全地は一つのことば、一つの話しことばであった。

11:4 そのうちに彼らは言うようになった。「さあ、われわれは町を建て、頂が天に届く塔を建て、名をあげよう。われわれが全地に散らされるといけないから。」

11:6 主は仰せになった。「彼らがみな、一つの民、一つのことばで、このようなことをし始めたのなら、今や彼らがしようと思うことで、とどめられることはない。

11:7 さあ、降りて行って、そこでの彼らのことばを混乱させ、彼らが互いにことばが通じないようにしよう。」

11:8 こうして主は人々を、そこから地の全面に散らされたので、彼らはその町を建てるのをやめた。

11:9 それゆえ、その町の名はバベルと呼ばれた。主が全地のことばをそこで混乱させたから、すなわち、主が人々をそこから地の全面に散らしたからである。

この出来事は、一見人間が一致して神に反逆する悪い出来事のように思えますが、この出来事の結末は「滅び」ではなく「散らす」です。そしてこの時に生まれたものが黙示録 7 章に登場する「数えきれぬ大勢の群集」につながってくると考えられます。

その後、私は見た。見よ。あらゆる国民、部族、民族、国語のうちから、だれにも数えきれぬほどの大ぜいの群衆が、白い衣を着、しゅろの枝を手に持って、御座と小羊との前に立っていた。(黙示録 7:9)

また新約においてもバベルの塔と同じような出来事が後に起こります。それはイエシュアの復活から 7 週間後、五旬節（ペンテコステ）と呼ばれる日の出来事です。

## 使徒の働き

2:1 五旬節の日になって、みなが一つ所に集まっていた。

2:2 すると突然、天から、激しい風が吹いて来るような響きが起こり、彼らのいた家全体に響き渡った。

2:3 また、炎のような分かれた舌が現れて、ひとりひとりの上にとどまった。

2:4 すると、みなが聖霊に満たされ、御霊が話させてくださるとおりに、他国のことばで話した。

つまりマグダラのマリヤ「反逆の塔」という彼女の名前には、イエシュアの復活の証人として、バベルの民のように、他国のことばをもって全世界に遣わされていく、散らされていく弟子たちが表されていると考えられます。ですからイエシュアがアダムの踏み直し「第二のアダム」であるならば、この五旬節の出来事は「第二のバベル」と言うことができると思われます。

イエスは彼らにこう言われた。「全世界に出て行き、すべての造られた者に、福音を宣べ伝えなさい。

(マルコ 16:15)

またマリヤ、ミルヤーム (מִרְיָם) という名前だけを見てもマル (מַר) 訳すと「にがい、苦しみ」という意味の言葉とヤーム (יָם) 「海、湖、大河」の合成語とも考えられ、「苦い水」という概念が浮かび上

がってきます。

#### 出エジプト

15:23 彼らはマラに来たが、マラの水は苦くて飲むことができなかった。それで、そこはマラと呼ばれた。

15:24 民はモーセにつぶやいて、「私たちは何を飲んだらよいのですか」と言った。

15:25 モーセは【主】に叫んだ。すると、【主】は彼に一本の木を示されたので、モーセはそれを水に投げ入れた。すると、水は甘くなった。その所で主は彼に、おきてと定めを授け、その所で彼を試みられた。

苦い水、ミルヤームに投げられた一本の「木」、それはイエシュアの十字架を表すと考えられます。イエシュアを信じ、受け入れたマリヤ、ミルヤームは「甘い水」になります。

15:26 そして、仰せられた。「もし、あなたがあなたの神、【主】の声に確かに聞き従い、主が正しいと見られることを行い、またその命令に耳を傾け、そのおきてをことごとく守るなら、わたしはエジプトに下したような病気を何一つあなたの上に下さない。わたしは【主】、あなたをいやす者である。」

神の計画として見るならば、甘い水は千年王国、そして次にたどり着く地「エリム」は新天新地を表していると考えられます。

15:27 こうして彼らはエリムに着いた。そこには、十二の水の泉と七十本のなつめやしの木があった。そこで、彼らはその水のほとりに宿営した。

甘い水は一本の木「十字架」によって甘い水になり、そして御国において「エリム (אֵילִם)」、アイル (אֵיל) 「力ある (神)」のメム (מ) 「水」となります。これがマリヤに秘められた御国の福音であると考えられます。